

# 「野幌原生林付近」出土の玦状耳飾と管玉

オホーツクミュージアムえさし所蔵新岡武彦コレクションから

坂本 尚史<sup>1</sup>, 柳瀬 由佳<sup>1</sup>, 高島 孝宗<sup>2</sup>

1. 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター, 2. 枝幸町教育委員会

**要旨** オホーツクミュージアムえさし所蔵の新岡武彦コレクションに確認された環状の玦状耳飾と管玉の資料紹介、及び道内類例との比較を行った。資料紹介では形態観察のほか、中央孔にトクサによる整形痕を認めた。併せて肉眼観察と化学組成分析による石材同定も行った。道内類例との比較では、まず道内の環状玦状耳飾の集成を行い「浮輪形」「金環形」「指貫型」の3類型と所属時期について把握したほか、トクサ整形痕の抽出にも留意した。これら道内資料との比較により、新岡コレクションの玦状耳飾は金環形と指貫形の間際の形態であること、所属時期が前期前半である可能性を指摘できた。また前期前半では道央部を中心にトクサによる整形痕を持つ玦状耳飾が普及していた様相が捉えられた。

**キーワード**：玦状耳飾, 浮輪形, 金環形, 指貫形, トクサによる整形痕

## はじめに

オホーツクミュージアムえさしには、新岡武彦氏の収集資料が所蔵されている。筆者らは2019年、そのうちの玦状耳飾2点と管玉1点を観察する機会を得た。玦状耳飾はその形態から道内では出土例の少ない金環形もしくは指貫形のものと同定され、またトクサによる特徴的な整形痕も観察された。

本稿ではこれら3点について資料紹介を行うとともに、石材の肉眼観察および化学組成分析による同定を行う。さらに道内出土玦状耳飾との比較を行い、類型などについて明らかにすることとしたい。また本稿については、今後北海道出土玦状耳飾の類型編年を構築する上での基礎研究として位置付けたいと考える。

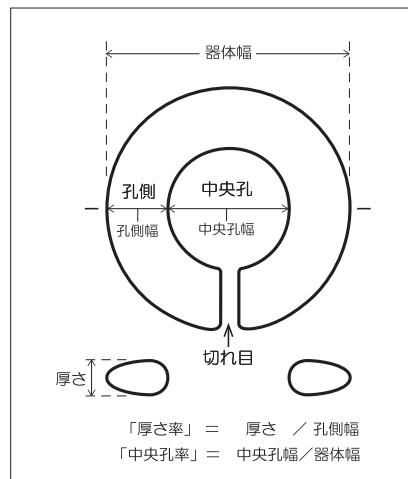


図 1. 玦状耳飾部位名称

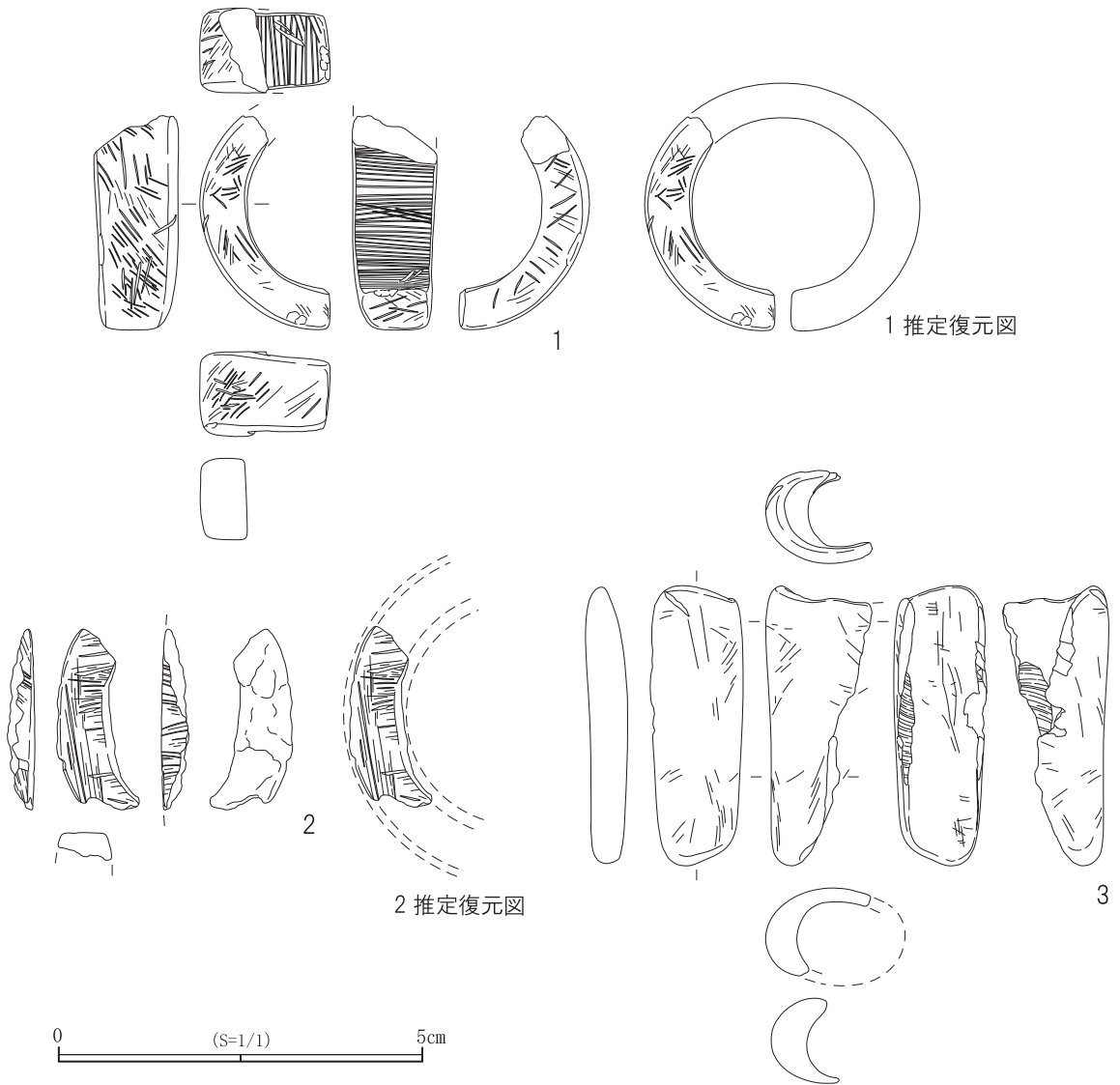


図 2. オホーツクミュージアムえさし所蔵 新潟武彦コレクション石製品

1. 資料の観察

対象資料 3 点を図 2・写真 1 に掲載した。資料には「寄贈考古資料 OME14-0012 野幌原生林付近」とのラベルが添付されている。1・2 は塊状耳飾の破片、3 は管玉の破片である。いずれも滑石製である（石材同定については後述）。なお、本稿で使用する塊状耳飾の部位名称及び計測位置等を図 1 に示す。

1 は塊状耳飾の破片で、切れ目を含む全体の 1/3 程度が残存する。平面形状は環状で、推定

復元すると中央孔は器体幅の 1/2 以上を占める。断面形状は縦長の長方形。孔の壁面は直線的で正面・裏面・側面はやや凸となる。孔側幅と厚さの比（以下「厚さ率」）は 1.8 であった。

中央孔の壁面には、特徴的な直線状の擦痕が確認できる。2 本組のように見える部分もあり、トクサを長軸方向に運動させることによって形成される整形痕と考えられる（堀江 2009b）。道内塊状耳飾のトクサ痕については福島町館崎遺跡で詳細に確認されており、塊状耳飾製作の技術的な特



写真 1. オホーツクミュージアムえさし所蔵 新潟武彦コレクション石製品 (S= 約 1:1)

徴として注目される(柳瀬 2017、坂本 2018)。

表面状態は正面・裏面・側面がよく研磨され光沢がある。部分的に擦痕がみられるが、加工痕が偶発的な傷なのか、判別が難しい。切れ目には不規則な擦痕がみられるが、擦り切り技法や糸切り技法の痕跡(五十嵐 2009、堀江 2009a・b)は確認できない。重さは 5.4g、大きさ等は表 2 に示した。

2 は玦状耳飾の小片である。側面と中央孔の壁面がわずかに残存する。平面形状は 1 と同様の環状と推定されるが、より大型とみられる。中央孔の壁面には 1 と同様のトクサによる整形痕がある。重さは 0.9g、大きさ等は表 2 に示した。

3 は管玉の欠損品。図の右側面とした部分の下側 2/3 ほどの範囲が紐ずれによって大きく摩擦したのちに欠損したものとみられ、図右側面の上部約 1/3 は割れ面であるが、下約 2/3 では縁が摩耗している。孔の壁面には、細かく不規則な擦痕が認められ、紐ずれによる痕跡の可能性はある。

長さ 3.9cm、幅 1.5cm、厚さ 1.3cm、重さ 5.5g。

なお、管玉については、早期末葉～前期の玦状耳飾に伴うことが指摘されており(川崎 1998、水ノ江 2019)、新潟コレクションの管玉も玦状耳飾に伴うものと考えても矛盾はない。

## 2. 石材同定

石材に関して、肉眼観察と、蛍光 X 線分析装置による全岩化学組成分析により同定を行った。資料 No. は図 2 と同一である。

### (1) 肉眼観察

ルーペ及び実体顕微鏡による観察を行った。

色調はいずれも緑褐色系で、マンセル表色系に基づく『新版標準土色帖』(小山・竹原 2011) に拠ると、1 は暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) ～暗オリーブ色 (5Y4/3)、2 は暗オリーブ色 (5Y4/4)、3 は暗オリーブ色 (5Y4/3) である。石質は共通して緻密で、研磨により光沢をもつ。黒色不透明で金属光沢のある結晶がすべてに含まれる。1・

2は最大で1mmほどの半自形～他形の結晶がやや多く含まれるほか、微細な半自形～他形の結晶もみられる。3は特に色調が均質で、半自形～他形の微小な結晶がわずかにみられる。

3点は色調が近似しており、特に1・2は黒色不透明結晶を含む点でも共通し、肉眼的によく類似している。

## (2) 化学組成分析

### 測定装置

化学組成の測定には、日本電子製エネルギー分散型蛍光X線分析装置JSX-3200を使用した。定性分析及びファンダメンタルパラメーター(FP)法による、標準試料を用いない半定量分析を行った。比較資料として、北海道立埋蔵文化財センター所蔵のキウス5遺跡出土滑石製珧状耳飾(図5)の全岩化学組成分析を併せて行った。

### 装置の仕様および測定条件

X線管球：

ターゲットがRhのエンドウィンドウ型

X線検出器：Si(Li)半導体検出器

管電圧：30.0kV

管電流：自動設定

雰囲気：真空

X線照射径：7mmあるいは1mm

測定時間：新潟武彦コレクション資料はライブタイムで300秒、キウス5遺跡資料は同120秒

測定は非破壊で行った。測定前には蒸留水での超音波洗浄とエタノールでの表面拭き取りを行った。

測定には各資料で任意の2か所を選定し、X線照射径7mmで行った。1の黒色不透明結晶を含む部位はX線照射径1mmでの測定を行った。キウス5遺跡資料は各資料1か所を測定した。

### 分析結果

図3に各資料の蛍光X線スペクトルを、表1に半定量分析による化学組成値を重量%で示す。

3点ともに、SiO<sub>2</sub>が62～65%程度、MgOが28～30%、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が5%前後からなり、滑石(Mg<sub>3</sub>Si<sub>4</sub>O<sub>10</sub>(OH)<sub>2</sub>)を主体とした岩石である。キウス5遺跡資料も同様の組成値を示す。黒色不

透明結晶を中心とした1mm範囲を測定した1c・1dでは、Cr<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が20.7%・25.6%、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が12.3%・12.9%含まれ、この黒色不透明結晶はクロム鉄鉱(FeCr<sub>2</sub>O<sub>4</sub>)と考えられる。クロム鉄鉱を含む滑石については、ダン橄欖岩起源の蛇紋岩が原岩であることが指摘されており(岡村ほか2008)、今後研究の進展に伴って原産地同定の手がかりとなる可能性がある。

## 3. 道内類例との比較

新潟コレクションの珧状耳飾について、道内出土例との比較を行う。類例の収集にあたっては、切れ目の確認できるものを珧状耳飾と認定したが、切れ目が無いものでも形状や加工痕から可能性があるものは対象とした。

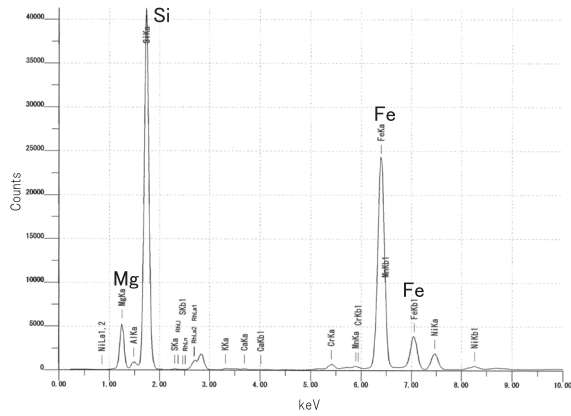
新潟資料が環状を呈するもののため、集成は環状(平面形が円形を呈し、中央孔が平面形と同心円であり、中央孔の大きさが器体幅の1/3より大きいもの)に限定することとした。また環状資料の類型分類は川崎2004(図4)に準拠した。結果、道内では「浮輪形」、「金環形」、「指貫形」の3類型が確認された。以下、類型ごとに資料を概観していく。個体ごとの属性については表2に掲載した。また類型定義にある「大きい」「厚い」などの表現を客観的に把握するため、「厚さ率」「中央孔率」を算出して数値化を試みた(図1・6・7)。

### 浮輪形(図5-1～5)

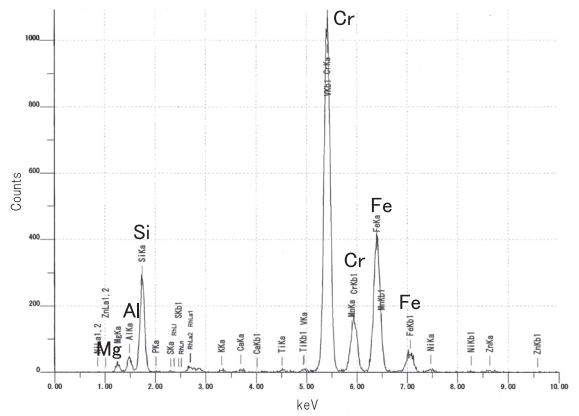
川崎の分類定義では「平面形は円形で、中央孔は孔側や切れ目の長さの和より大きい。厚さは孔側や切れ目の長さより薄いものが主体」と説明されている。道内の類例は3遺跡・5点である。全て早期中葉の石刃鍬文化に属するものと考えられており、分布は道東部に限定される。

切れ目を有す珧状耳飾は共栄B遺跡の2点で、他は切れ目が残存しないため環状石製品の可能性を残す。大きさ(復元器体幅)は6cm以下のもの(1～3)と、10cm程の特大型(4・5?)に二分され、後者は別器種の可能性も考えられる。断面形は1～5が扁平な類楕円形で、厚さ率は0.5前後。中央孔側が厚く外周側が薄い断面形状は本

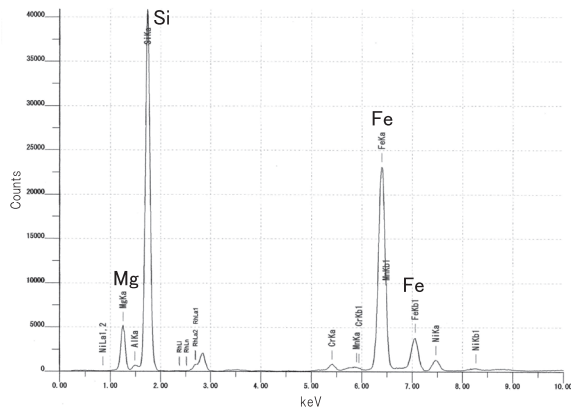
No.1b 滑石



No.1d (径 1 mm) クロム鉄鉱部分



No.2a 滑石



No.3a 滑石

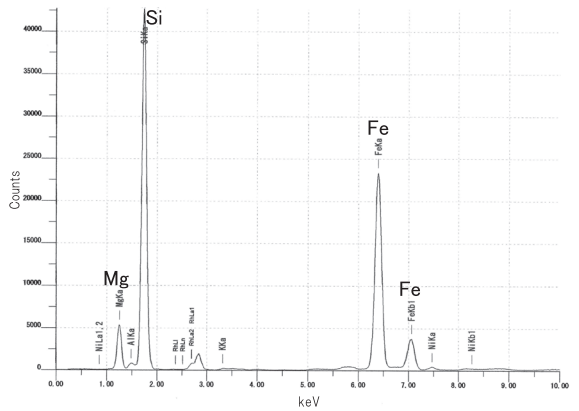


図 3. 新潟武彦コレクション石製品 蛍光 X 線スペクトル図

表 1. 新潟武彦コレクション石製品・キウス 5 遺跡状耳飾 化学組成値

遺跡名	「野幌原生林付近」							キウス 5 遺跡						
	1		2		3		9	10	16	17	18	20		
No.	a	b	c	d	a	b	a	b	7mm	7mm	7mm	7mm	7mm	7mm
分析位置	7mm	7mm	1mm	1mm	7mm	7mm	7mm	7mm	7mm	7mm	7mm	7mm	7mm	7mm
X線照射径	300	300	300	300	300	300	300	300	120	120	120	120	120	120
測定時間 (秒)	滑石	滑石	クロム鉄鉱部分	クロム鉄鉱部分	滑石	滑石	滑石	滑石	滑石	滑石	滑石	滑石	滑石	滑石
SiO <sub>2</sub>	62.80	63.68	40.10	35.99	64.27	63.95	64.75	64.31	63.67	61.92	64.82	63.74	64.03	62.69
TiO <sub>2</sub>	—	—	—	0.20	—	—	—	—	0.04	0.11	0.12	—	0.05	0.06
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	1.46	1.60	4.74	9.40	0.94	1.97	1.16	0.81	1.09	1.42	2.47	2.98	1.69	3.29
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	5.54	5.04	12.36	12.96	4.90	5.82	4.68	4.66	6.21	6.19	5.67	5.09	5.88	6.88
MnO	0.05	0.04	0.24	0.14	0.05	0.08	—	0.05	0.05	0.07	0.05	0.06	0.05	0.07
MgO	28.63	28.99	20.67	13.93	29.45	27.81	29.27	30.03	28.62	29.41	26.40	27.21	28.04	25.14
CaO	0.09	0.05	—	0.24	—	0.06	—	—	0.08	0.16	0.09	0.12	0.06	—
Na <sub>2</sub> O	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K <sub>2</sub> O	—	0.06	0.16	0.31	—	0.09	0.09	0.04	—	0.56	0.05	0.01	—	0.09
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	—	—	0.45	0.57	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SO <sub>3</sub>	—	0.08	—	0.13	—	—	—	—	0.09	—	0.15	0.08	—	1.43
Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	1.03	0.14	20.72	25.61	0.18	0.02	—	—	—	—	0.03	0.13	0.02	0.06
NiO	0.39	0.31	0.24	0.23	0.21	0.20	0.05	0.10	0.08	0.15	0.16	0.23	0.18	0.29
Cl	—	—	0.05	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	—	—	0.22	0.22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ZnO	—	—	—	0.09	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ZrO <sub>2</sub>	—	—	0.05	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
In <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.33	—	—
Ta <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	—	—	—	—	—	—	—	—	0.06	—	—	—	—	—

類型の特徴と考えられる。

6は同文化の所産で中央孔様の部位を有すため球状耳飾としての注意が払われているものである(麻柄 2002)。破片のため類型判断は困難だが参考資料として掲載した。

石材は、1は自然科学的分析により緑泥石岩と同定されている(柳瀬 2018)。3は「翡翠」と報告されているが、「軟玉」の可能性が高いとの指摘もある(藤田 2003)。

なお、北海道の浮輪形球状耳飾については、切れ目の状態などから球状耳飾の認定を疑問視する意見と、中国東北部周辺を起源とする北方からの伝播ルートを考える立場から積極的に認定する意見がある。

**金環形 (図 5-7 ~ 11)**

川崎の分類定義では「平面形は円形で、中央孔は孔側や切れ目の長さの和とほぼ同じくらい。厚さは孔側の幅とほぼ同じくらいかやや薄い。」と説明されている。道内の類例は4遺跡・5点である。分布は道南の津軽海峡沿岸部に2点、道央の石狩低地帯に3点がみられる。

集成したものは全て包含層出土であるが、時期は前期前葉1点、前期前半の可能性のあるもの2点、前期後半もしくは中期前半のもの1点があり、前期前半のものが目立つ。

7~9は切れ目を有すもの、10・11は切れ目がみられないものである。7は函館市八木A遺跡出土の完形品で孔側の断面形は三角形を呈す。切れ目には糸切り痕が観察でき、現時点では道内で唯一の糸切り技法の確認例である(坂本 2018)。8~11は孔側の断面形が方形に近いもので、8・9は環の幅が均等、10は図の下方(切れ目側?)が細くなっている。厚さ率は1.0前後。全体として正裏面に明瞭な平坦面を有す点が形態的特徴と捉えられる。

大きさ(復元器体幅)は7~10が3.5~4.5cmほどで近似するが、11は10cm前後と特大型で腕輪など別器種の可能性が指摘されている(松前町教委 1991)。製作技術についてはキウス5遺跡出土の9・10に中央孔を整形したトクサ痕が認められる。石材は、自然科学的分析により7

がネフライト、9・10が滑石と同定されている(柳瀬 2018、本稿)。また、8はカンラン岩、11は滑石と報告されている。

**指貫形 (図 5-14 ~ 19)**

川崎の分類定義では「平面形は円形。中央孔は孔側より長い。厚さは非常に厚い」と説明されている。道内の類例は3遺跡・6点である。分布は道央の石狩低地帯に限定される。

集成したものは全て包含層出土だが、時期は前期前半の可能性のあるもの5点、中期後半の可能性のあるもの1点がみられる。前期前半のものが目立つ。

14~16は切れ目を有すもの、17~19は切れ目のないものである。平面形は14・16・17など正円に近いものが多くあり、他の欠損品も同様な復元が可能とみられる。金環形とは異なり、正裏面には明瞭な面を持たないものが主体である。

断面形は14~17・19が紡錘形、18が長方形を呈し、厚さ率は3.0前後。18は正面に擦り切り痕を残し未成品と考えられる。このため断面の長方形も完成形状ではなく、紡錘形へ整形する前の状態を示すのかもしれない。

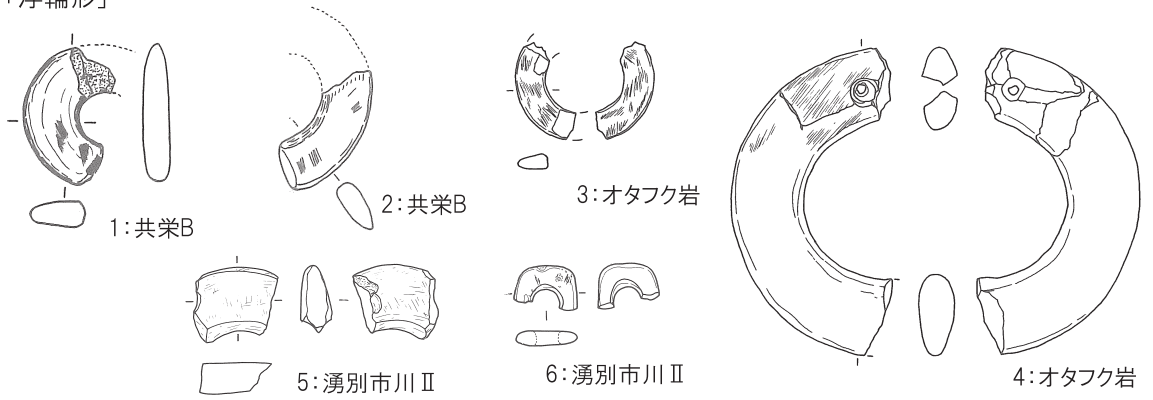
孔側幅は0.4~0.6cmで他の類型に比べ値が小さく、薄い器壁を示すものが主体である。

大きさ(復元器体幅)は14・17が4.0~4.5cm、16が2.5cmで大小がみられる。製作技術については14~16・18・19の中央孔にトクサ痕

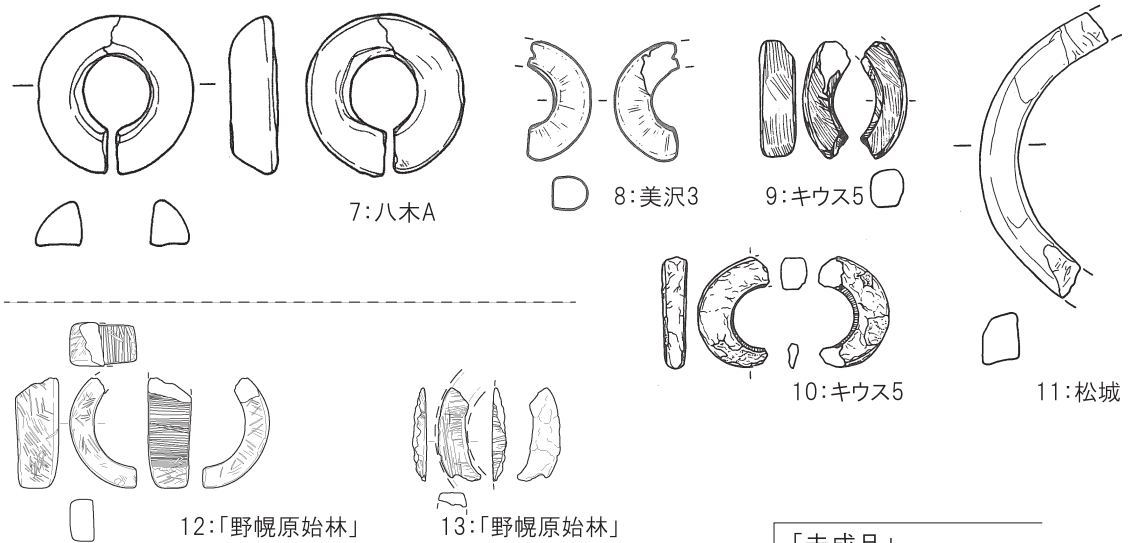
時期	類型	浮輪形	金環形	[有明神社型]	指貫形	円盤形・球状	三角形	楕円形
	早期							
前期	後葉							
	末葉							
	初頭							
中期	中葉							
	後葉							
中期	初頭							
	中葉							

図 4. 球状耳飾の類型編年 (川崎 2004)

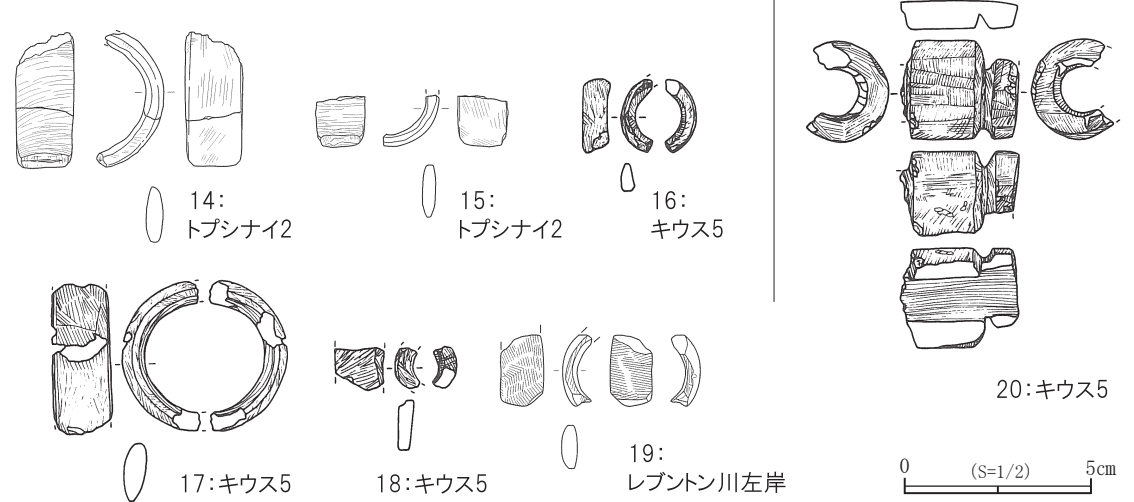
「浮輪形」



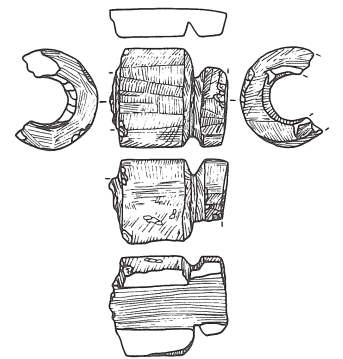
「金環形」



「指貫形」



「未成品」



0 (S=1/2) 5cm

図 5. 北海道出土 環状塊状耳飾集成

表2. 北海道出土 環状球状耳飾一覽

図番号	地域	中間村名	遺跡名	類型	切れ目 残存	トクサ痕	出土 状況	時期	大きさ (cm)				厚さ率	復元 器体 幅	中央 孔径	中央 孔率	石材	備 考	文 献
									長	幅	厚	孔間幅							
図5-1	道東	浦幌町	共栄B遺跡	浮輪形	有	無	包含層	早期中葉	(3.7)	(2.7)	0.8	1.5	0.5	4.5	1.5	0.33	凝泥石岩 あり	切れ目部に刺刺面が摩滅したような凹凸あり	浦幌町教委 1976
図5-2	道東	浦幌町	共栄B遺跡	浮輪形	有		包含層	早期中葉	(3.2)	(2.5)	0.6	1.4	0.4	6.0	3.2	0.53	不明		浦幌町教委 1976
図5-3	道東	羅臼町	オタラク岩遺跡	浮輪形	無		包含層?	早期中葉	(8.2)	(4.4)	0.9	2.3	0.4	10.0	5.4	0.54	不明		羅臼町教委 1991
図5-4	道東	羅臼町	オタクク岩遺跡	浮輪形	無		包含層?	早期中葉	(2.7)	(1.8)	0.5	0.8	0.6	3.5	1.9	0.54	翡翠		羅臼町教委 1991
図5-5	道東	湧別町	湧別市川II遺跡	浮輪形?	無		包含層	早期中葉	(1.7)	(3.0)	(0.9)	1.5	-	-	-	-	不明		湧別町 1985
図5-6	道東	湧別町	湧別市川II遺跡	異形	無		包含層	早期中葉	(1.2)	(1.7)	0.4	-	-	-	-	-	不明		湧別町 1985
図5-7	道南	函館市	八木A遺跡	金環形	有	無	包含層	前期前葉	4.1	4.1	1.3	1.2	1.1	-	-	-	ネフライト	切れ目は糸切り	南茅渚町埋蔵文化財調査団 1995
図5-8	道央	苫小牧市	美沢3遺跡	金環形	有		包含層	不明	(3.1)	(1.7)	0.9	1.0	0.9	4.0	2.08	0.52	カンラソソ岩	遺物は早期後葉主体だが、耳飾のそばからは手編式土器片1点が出土	道理文 1981
図5-9	道央	千歳市	キウス5遺跡	金環形	有	無	包含層	前期前半?	(3.1)	(1.9)	1.0	0.9	1.1	4.5	2.7	0.60	清石		道理文 1996
図5-10	道央	千歳市	キウス5遺跡	金環形	無	有	旧河道	前期前半?	(3.0)	(2.0)	0.7	0.6	1.2	3.5	2.3	0.66	清石		道理文 1996
図5-11	道南	松前町	松城遺跡	金環形?	無		包含層	前期後半もしくは 中期前半	(7.4)	(3.5)	1.2	1.0	1.2	10.0	8	0.80	清石	旋輪の可能性	松前町教委 1991
図5-12	道央	札幌・江別 北広島市	野幌原生林	金環一指貫形	有	有	表採	不明	(3.0)	(1.9)	1.1	0.6	1.8	3.5	2.3	0.66	清石	枝幸町教育委員会埋蔵新岡コレクション	
図5-13	道央	札幌・江別 北広島市	野幌原生林	金環一指貫形	無	有	表採	不明	(2.5)	(1.2)	(0.4)	0.8	-	-	-	-	清石	枝幸町教育委員会埋蔵新岡コレクション	
図5-14	道央	千歳市	トツナイ2遺跡	指貫形	有	有	包含層	前期前半?	(3.6)	(1.7)	1.6	0.5	3.2	4.0	3	0.75	清石		道理文 2018
図5-15	道央	千歳市	トツナイ2遺跡	指貫形	有	有	包含層	前期前半?	(1.4)	(1.3)	1.3	0.4	3.3	-	-	-	清石		道理文 2018
図5-16	道央	千歳市	キウス5遺跡	指貫形	有	有	旧河道	前期前半?	(1.9)	(1.2)	0.7	0.4	1.8	2.5	1.7	0.68	清石		道理文 1996
図5-17	道央	千歳市	キウス5遺跡	指貫形	無	無	包含層	前期前半?	4.0	(2.0)	1.6	0.6	2.7	4.5	3.3	0.73	清石		道理文 1996
図5-18	道央	千歳市	キウス5遺跡	指貫形	無	有	包含層	前期前半?	(1.1)	(0.7)	1.2	0.4	3.0	-	-	-	清石		道理文 1996
図5-19	道央	長沼町	レゾント川左岸遺跡	指貫形	無	有	包含層	中期後半?	(1.9)	(0.8)	1.1	0.4	2.8	-	-	-	清石		道理文 2017
図5-20	道央	千歳市	キウス5遺跡	未成品?	-	有	包含層	前期前半?	2.6	(2.0)	3.0	0.8	-	-	-	-	清石		道理文 1996

※欠損品の大きさにについては括弧付きで現存値を表記した。

※石材は自然科学的手法により同定されたものを網掛けで表した。

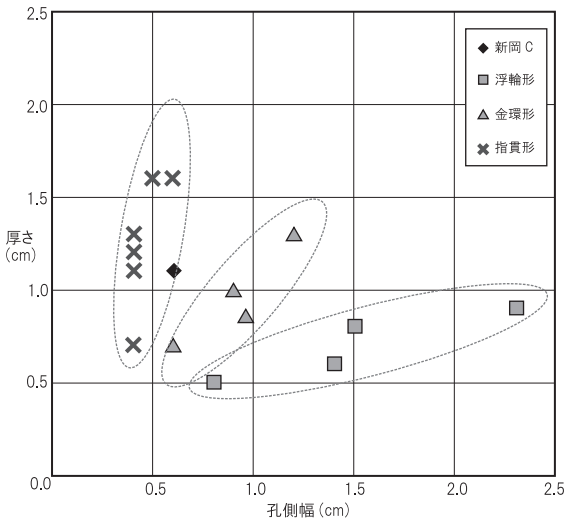


図 6. 環状状耳飾 厚さ率の分布

が観察され、トプシナイ 2 遺跡、キウス 5 遺跡、レプトン川左岸遺跡の 3 遺跡に確認されたこととなる。

また 20 は未成品とみられる資料で、円筒状の素材を擦り切りによって輪切りにし、指貫形を製作する工程を示す資料と考察されている（中山 1996）。孔壁には金環形・指貫形にもみられる明瞭なトクサ痕が観察されること、また、18 に擦り切り痕が残されていることも、20 を環状耳飾未成品と判断する有力な根拠と考える。

石材は、全て自然科学的分析により滑石と同定されている（アースサイエンス株式会社 2017・2018、本稿）。

#### 類例との比較

新岡コレクションに観察された特徴には、①平面形が正円に近く、②断面形は厚さ率が 1.8 の長方形、③正裏面に明瞭な平坦面を有し、④大きさは 3.5cm 及びそれ以上のもの、⑤製作技術には中央孔壁のトクサ痕がみられる、などがあげられる。

平面形に注目すると、正円に近いものは各類型にみられるが、器体幅に占める中央孔幅の割合（中央孔率）で比較すると、浮輪形が 0.33～0.54、金環形が 0.52～0.66 主体、指貫形が 0.68～

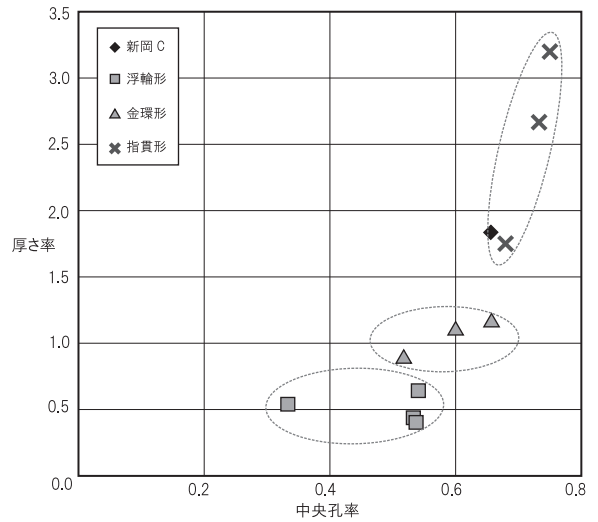


図 7. 環状状耳飾 厚さ率 - 中央孔率の分布

0.75 に対し、新岡コレクションは 0.66 と金環形と浮輪形の間値的な値となった。

断面形では、新岡コレクションの長方形で正裏面に平坦面を有す形状は金環形に共通する。但し厚さ率 1.8 は金環形の 1.0 前後と指貫形の 3.0 前後の間値的な値となっている。

大きさは各類型に近似のものがある。

製作技術では、新岡コレクションにみられたトクサ痕跡を金環形と指貫形の両者に認めることができた。

以上のことから、新岡コレクションの環状耳飾は金環形・指貫形類型の両者に共通する特徴と、間値的な形態値を持つことが明らかとなった。両類型の間値的な様相を示す資料と結論できる。

新岡コレクション資料については採集地点や出土の状況など不明な点が多いが、形態及び製作技術から縄文時代前期前半の環状耳飾の可能性を指摘することができるだろう。併せて製作技術の観点からは、トクサによる整形が施された環状耳飾が前期前半の道央部で普及していた様相が捉えられる。

#### 4. まとめ

北海道出土の環状塊状耳飾を集成し、新潟コレクション資料との比較を行った。結果、北海道には早期中葉の浮輪形、前期前半以降に出現する金環形・指貫形があり、新潟コレクションは後2者の中間的な形態を持つことが明らかとなった。但し浮輪形については塊状耳飾としての認定に問題を残している(水ノ江2017)。

本州長野県の資料をもとに提示された川崎保の編年では、浮輪形は早期後葉～前期初頭、金環形は早期末葉～前期中葉、指貫形は早期末葉～前期初頭に位置付けられている。本稿の集成で得られた各類型の時期と比較すると、浮輪形は本州より北海道が古く、金環形・指貫形は北海道が若干出現が遅れるもののほぼ並行した関係が認められる。

北海道の塊状耳飾の初現については中国東北部周辺からの北方伝播ルートが提示・議論されている(藤田2002、麻柄2002)。しかし、北海道に伝播した塊状耳飾がその後盛行期を迎える前期にかけてどのように展開し、中期に収束していったのか、現状では明確にされているとは言い難い。この問題に対しては道内出土の各類型を網羅した集成を行い、類型編年を構築していく必要があると考えている。稿を改めて提示していきたい。

#### 図出典

- 『共栄 B 遺跡』1976 浦幌町教育委員会  
 『湧別市川Ⅱ遺跡』1985 湧別町  
 『オタフク岩遺跡』1991 羅臼町教育委員会  
 『美沢川流域の遺跡群Ⅳ』1981 財団法人北海道埋蔵文化財センター  
 『千歳市キウス5遺跡(2)B地区』1996 財団法人北海道埋蔵文化財センター  
 『千歳市トプシナイ2遺跡 イカベツ2遺跡』2018 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター  
 『長沼町幌内K遺跡 レブント川左岸遺跡  
 レブント川右岸遺跡 南9号線遺跡』2017 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター  
 『八木A遺跡Ⅱ・ハマナス野遺跡』1995 南茅部町埋蔵文化財調査団  
 『松城遺跡』1991 松前町教育委員会

#### 引用・参考文献

- アースサイエンス株式会社, 2017, 「レブント川左岸遺跡 石製品の岩石学的分析」『長沼町幌内K遺跡 レブント川左岸遺跡 レブント川右岸遺跡 南9号線遺跡』. 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター.  
 アースサイエンス株式会社, 2018, 「トプシナイ2遺跡出土石製品の岩石学的分析」『千歳市トプシナイ2遺跡 イカベツ2遺跡』. 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター.  
 阿部明義・澤田健, 2010, 「北海道の塊状耳飾」『玉文化』7. 日本玉文化研究会.  
 五十嵐睦, 2009, 「装飾製作における切り目作出技術について～「弓切り技法」の実験的考察～」『塊状耳飾(装飾)の製作技術からみた玉文化交流発表予定稿集』. 日本玉文化研究会長野大会実行委員会.  
 岡村聡・菅原いよ・加藤孝幸・加藤欣也・立田理, 2008, 「根室市初田牛および常呂川河口遺跡から出土する玉類の石質と起源」『北海道教育大学紀要(自然科学編)』59(1). 北海道教育大学.  
 小山正忠・竹原秀雄, 2011, 『新版標準土色帖 34版』. 日本色研事業株式会社.  
 川崎保, 1998, 「塊状耳飾と管玉の出現」『考古学雑誌』83(3). 日本考古学会.  
 川崎保, 2004, 「玉の類型編年 塊状耳飾」『季刊考古学』89. 雄山閣.  
 坂本尚史, 2018, 「展示担当の役得」『テエタ(公財)北海道埋蔵文化財センターだより』40.  
 芝田直人, 2018, 「Ⅶ総括1トプシナイ2遺跡」『千歳市トプシナイ2遺跡 イカベツ2遺跡』. 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター.  
 中山昭大, 1996, 「Ⅳ遺物3石製品・土製品・石錘」『千歳市キウス5遺跡(2)B地区』. 財団法人北海道埋蔵文化財センター.  
 藤田富士夫, 2002, 「日本列島の塊状耳飾の始原に関する試論」『縄文時代の渡来文化』. 雄山閣.  
 藤田富士夫, 2003, 「環状型塊状耳飾に関する基礎的考察」『新世紀の考古学—大塚初重先生喜

寿記念論文集一』. 大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会.

堀江武史, 2009a, 「糸切り技法による塊状耳飾の製作」『塊状耳飾（塊飾）の製作技術からみた玉文化交流発表予定稿集』. 日本玉文化研究会長野大会実行委員会.

堀江武史, 2009b, 「日本出土塊状耳飾の製作技法」日本玉文化研究会第7回シンポジウム長野大会『塊状耳飾（塊飾）の製作技術からみた玉文化交流』当日配布資料.

麻柄一志, 2002, 「石刃鏃文化の石製装身具」『縄文時代の渡来文化』. 雄山閣.

水ノ江和同, 2017, 「縄文時代早期の北海道と周辺地域との関係性について—石製装身具を中心に—」『縄文時代』28. 縄文時代文化研究会.

水ノ江和同, 2019, 「日本列島の塊状耳飾」『考古学雑誌』102(1). 日本考古学会.

柳瀬由佳, 2017, 「VI石器・石製品等6総括 塊状耳飾」『福島町館崎遺跡』. 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター.

柳瀬由佳, 2018, 「ア、石製装身具の材質分析」『北海道立埋蔵文化財センター年報』19.